No. 4
2009年12月1日
発行
甲南大学FD委員会

INDEX

❶ 教育力の開発 FDとは～甲南大学の取組み～
❷ 10月23日 FD講演会を開催いたしました！
❸ ゼロから作り上げる
～フロンティアサイエンス学部のFD活動～
学外 FDセミナーに行ってきました！

FD NEWS
［甲南FDニュース］

教育力の開発 FDとは～甲南大学の取組み～

NEWS 1

1．FD活動の充実化に向けて

2009年度は、全学的なFD委員会に加え個別FD委員会を設置するなど、個々の教員のFD活動を支える組織的な体制づくりをめざしています。また「企画・運営」「広報・情報」「授業改善」「大学院」といった分科会・部会の開催をとおして、授業改善アンケートやFD講演会の企画・実施、ホームページ・FDニュースでの情報発信を積極的におこなっています。

授業改善アンケートは今年度から国際言語文化センターが加わり、対象となる授業科目が862科目増えて1872科目になりました。ホームページもユーザビリティを第1に考えて全面的にリニューアルしました。貸出図書のページには読んだ方のコメントやおすすめ度を★で表示していますが、今後ますます充実させる予定です。ご期待ください。シラバスについてもガイドラインを作成し、学生の視点から作成していただくよう呼びかけました。

2．さまざまな役割としての分科会

授業改善のためにおこなう「授業アンケート」は、授業改善分科会の最も大きな任務です。まず、設問項目の設定とその結果の公表方法について検討します。本年度のアンケートでは、学生が答えやすく、教員が容易にフィードバックできる内容に改善しました。今後も、設問項目、実施時期、公表方法などを再検討し、2010年度にはより効果的なアンケートが実施できればと考えています。

分科会では、教育環境をめぐる諸問題についても検討しています。具体的には、各学部での就学支援の取組みについての現状調査をおこない、指導主任制度による学生就学支援や成績が思わしくない学生への指導状況を把握しました。また講義時間中のマナー向上啓発についても現状を把握し、クラス内、教学勉学上のマナーについて、より実効性のある改善策について議論しています。これらの成果を定期的にFD委員会全体に報告、検討・共有するよう努めています。

CHECK! 褒めてあげたい甲南生のこんなところ

「この授業の予習、復習または課題のために毎回どれくらい時間を使いましたか？」という質問に対する回答です。

2008年度後期と2009年度前期を比較すると
「30分程度」
20.08%→25.88%
「1時間程度」
5.05%→ 8.51%
「1時間30分程度」
1.35%→ 2.47%
「2時間以上」
2.27%→ 2.70%

と増加しています。2010年度のシラバスから準備学習が示されるようになり、さらに増えることが予想されます。

（授業改善アンケートより）

10月23日 FD講演会を開催いたしました！

NEWS 2

テーマ 生き抜く力を育てる大学教育とは？ —企業社会の変貌のなかで—

■講演会
講　師：本田由紀　氏
東京大学大学院教育学研究科教授（教育社会学）
■討論会
討論者：本田由紀　氏
中里英樹　教授（文学部）
阿部真大　講師（文学部）
司　会：西欣也　准教授（文学部）

FD委員会では、10月23日（金）13時から1022講義室において、FD活動およびキャリア教育の一環として、文学部、キャリアセンターと共催で講演会を開催いたしました。第1部では東京大学大学院教育学研究科の本田由紀教授にご講演をいただきました。大卒者数の増加、出身大学による格差の広がり、早期離職率の高まり、正社員・非正社員それぞれの疲弊、日本社会に特有の長時間労働、採用基準の曖昧さ、新卒者偏重、就職活動の早期化・・・・、多岐にわたる統計データを次々に分析、解説されるという盛り沢山な内容でありながら、時間を感じさせないご講演でした。社会の移り変わりをわかりやすく解説された一方で、企業トップにむけては、痛烈な批判で立ち向かう果敢な姿勢が見られました。第2部の討論会では、文学部教員2名が加わり、講演の内容に踏み込んだ議論を交わしました。質疑応答も行われ、教員や学生の多種多様な質問にも、丁寧にお答えいただきました。参加者は80名を超え、学外からの熱心な受講者も目立ちました。めざすべき若年労働市場のために、本田先生は企業にも変革が必要であると主張されています。一方で大学には、従前の「赤ちゃん受け渡しモデル」（受け渡しさえすれば、後は企業が必要な教育をしてくれる。）という時代ではなくなっているという現実が突きつけられています。欧米型の「棒高跳びモデル」に耐えうる「体力」と、「棒」をいかにして学生に与えられるのか。我々甲南大学でも本田先生の熱意に負けぬよう、棒高跳びに耐えうる「しなやかさ」を身につけるための教育について、これから真剣に議論していきたいと思います。

注目！
次回のFD講演会はコレ！

2010年1月22日（金）
-Beyond FD- 知能情報学部FD講演会

2010年3月3日（火）
授業外学習を促すコツ＆成績評価ティップス先生が来ます！

詳しくは甲南大学FDページをご覧ください
http://www.konan-u.ac.jp/laboratory/fd/index.html

FD NEWS
NEWS 3

ゼロから作り上げる
～フロンティアサイエンス学部のFD活動～

生命化学科 教授 松井淳

新学部であるフロンティアサイエンス学部（FIRST）では、質の高い教育コンテンツ及びシステムをゼロから作り上げていく必要があったため、開設準備の早い段階から自然に、FD活動に関する議論が盛んに行われてきました。現在も、いくつかFD関連の計画を議論していますが、ここでは現在実施中である「教員による授業相互参観」及びその効果の一例について記させていただきます。

本学部のような融合系テクノロジー（例えばナノテクとバイオの融合による医療・診断技術の開発など）を指向する学部においては、授業間の連携を図って、科目間の関連性や互いの重要性を学生に理解させることがとりわけ重要になります。教員間の授業参観は、授業の内容や進捗状況、さらに学生の関心度（何割の学生がメモを取りながら話を聴いているか、何割が教員の方に顔を向けて話を聞いているかなど）及び理解度（何割が授業に出された課題をクリアしているかなど）をリアルタイムで知り、自らの授業に反映させることができるので、授業と授業を関連づけるのに非常に有効です。

〈授業の空いた時間に行われているセミナーの様子〉

したがって、原則、全講義科目で参観を実施しており、科目ごとに予め定められた教員2名が、最低2回は参観し、授業評価や気づいた点などについてレポートを作成・提出することとしています。また、担当以外の教員も、いつでも参観可能です。提出されたレポートによって、参観をする方も受ける方も、構成、話し方、資料作成・提示などに関する方法論について、質を高めていくことができると考えています。私も双方を経験しましたが、（大変なプレッシャーではありますが）どちらも非常に有意義な経験であり、今後の授業づくりに大いに参考になると感じております。ほとんどの教員が同様の感想を抱いているようです。

副次的な効果として、参観した授業のことを話題にして、学生とのコミュニケーションが増えるようにも感じています。そのような日常会話から聞かれた学生の声に応えるかたちで、「基礎固め」「Q&A」「先進的事柄の紹介」などを目的としたセミナー（写真）を各教員が開いており、授業の枠組みを超えたインタラクティブな関係が生まれつつあります。

2009年度 甲南大学 FD委員会 委員

重松　利彦	副学長　（委員長）
石井　　昇	大学企画室長
馬場　大治	教務部長
森元　勘治	広域副専攻センター所長
中里　英樹	文学部･人文科学研究科
小堀　裕己	理工学部
柘植　隆宏	経済学部･社会科学研究科経済学専攻
笹倉　香奈	法学部
廣山　謙介	経営学部･社会科学研究科経営学専攻
渡邊　栄治	知能情報学部
ジョーンズ ブレンド	マネジメント創造学部
松井　　淳	フロンティアサイエンス学部･フロンティアサイエンス研究科
宇都宮弘章	自然科学研究科
藤原三枝子	国際言語文化センター
水澤　克子	スポーツ･健康科学教育研究センター
西川　耕平	EBA高等教育研究所
鳩貝　耕一	情報教育研究センター
早瀬　勝明	法科大学院
家田　　崇	会計大学院
石田　彰徳	教務部の専任職員管理職
美馬久美子	大学企画室の専任職員管理職

（2009.6.1現在）

Report

学外FDセミナーに行ってきました！

スポーツ・健康科学教育研究センター
准教授 水澤克子

2009年5月30日、関西大学で行われたフォーラムに参加しました。複数大学のFD関係者による基調講演、パネルディスカッションが行われました。

大学の歴史的背景や大学の規模、元の経営母体によってもFDの取り組みにいろいろな課題があるようです。ある大学では全学的なFD活動に消極的な学部もあるとのことでした。また、元々の経営母体の違いによるものなのか、教員と職員の間でFD活動に対して温度差があるという大学の話も聞かれました。

一方では教職員に対してFD・SDについて2年間で10数回のセミナーを行い、セミナー参加をほぼ義務化しているという大学もありました。

甲南大学においては、現在のFDへの取り組みだけでなく、全学的なFDへの理解、協力体制を構築するための、より教職員が参加しやすい時間設定でのセミナーや勉強会の複数開催を検討する余地があるのではないでしょうか。

このように複数の大学の現状を知り、また意見交換の場に参加できましたことは非常に有意義でありました。